



Title	日本語有対自他動詞の語形式的類型性：終止形活用語尾[-eru] 自動詞と[-asu] 他動詞を中心に
Author(s)	小池, 康
Citation	日本語・日本文化研究. 2020, 30, p. 53-72
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77706
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語有対自他動詞の語形式的類型性

—終止形活用語尾 [-eru] 自動詞と [-asu] 他動詞を中心に—

小池 康

1. はじめに

本稿は、小池（2018、2019）で提示された、ペアとなる動詞を有する自動詞と他動詞（以下「有対自他動詞」と呼ぶ）を形式的な共通性より九つの型に分類したもの（表1）を基に、そのうちのタイプ④・⑤・⑧について、各タイプの特徴やタイプ間の連続性と・差異性について考察するものである。

表1は有対自他動詞を連用形活用語尾の形式より類型化したものである。たとえばタイプ③ [-i/-e] ^[*1] では「開く／開ける」の連用形が「開きマス ak-i-masu／開けマス ak-e-masu」のように i と e の部分のみで自他が対立していることを示している。同様に、タイプ④ [-e/-i] では「割れる／割る」の連用形が「割れマス war-i-masu／割りマス war-e-masu」のように e と i の部分のみが異なり、その点でのみ自他が対立していることを表わしている。

表1 有対自他動詞（連用形活用語尾）の形式的タイプ

例	自動詞	他動詞	例
① 合わさる、刺さる、掴まる、繋がる、はさまる	-ari	-i	合わす、刺す、掴む、繋ぐ、はさむ
② 上がる、当たる、合わさる、重なる、変わる、決まる、混ざる、見つかる、横たわる		-e	上げる、当てる、合わせる、重ねる、変える、決める、混ぜる、見つける、横たえる
③ 開く、浮かぶ、片付く、苦しむ、進む、育つ、揃う、立つ、並ぶ	-i	-e	開ける、浮かべる、片付ける、苦しめる、進める、育てる、揃える、立てる、並べる
④ 売れる、欠ける、切れる、碎ける、知れる、取れる、ほどける、焼ける、破れる、割れる	-e	-i	売る、欠く、切る、碎く、知る、取る、ほどく、焼く、破る、割る
⑤ 荒れる、焦げる、冷める、出る、溶ける／冷える、増える、燃える	-e	-asi	荒らす、焦がす、冷ます、出す、溶かす／冷やす、増やす、燃やす
⑥ 現われる、隠れる、こぼれる、壊れる、流れる、離れる、乱れる、蒸れる、よごれる	-re	-si	現わす、隠す、こぼす、壊す、流す、離す、乱す、蒸す、よごす
⑦ 起こる、転がる、散らかる、通る、なおる、濁る、残る、ひたる、回る、戻る、渡る	-ri		起こす、転がす、散らかす、通す、なおす、濁す、残す、ひたす、回す、戻す、渡す
⑧ 乾く、飛ぶ、鳴る、減る／生きる、閉じる、伸びる	-i	-asi	乾かす、飛ばす、鳴らす、減らす／生かす、閉ざす、伸びる
⑨ 起くる、落ちる、降りる、減ぼる		-osi	起こす、落とす、降ろす、減ぼす

筆者は小池 (2018) において、タイプ③と④の比較、そして③と②との連續性および④と⑤との連續性について考察した。また、小池 (2019) ではタイプ間で共通の形式を有するタイプ①～③を対象に、動詞の古形の影響の有無および接辞 *er* と *ar* の比較より考察を加えた。

本稿で対象とするタイプ④・⑤・⑧の形式的な特徴は以下のようになる。

タイプ④：自動詞連用形 [-e] (終止形 [-eru]) ／他動詞 [-i] (終止形 [-u])

タイプ⑤：自動詞連用形 [-e] (終止形 [-eru]) ／他動詞 [-asi] (終止形 [-asu])

タイプ⑧：自動詞連用形 [-i] (終止形 [-u]) ／他動詞 [-asi] (終止形 [-asu])

タイプ④と⑤は自動詞形が [-e] (終止形 [-eru]) になる点で共通しており、またタイプ⑤と⑧は他動詞形が [-asi] (終止形 [-asu]) になる点で共通している (表2参照)。

表2 タイプ④・⑤・⑧の有対自他動詞の形式的タイプ

	例	自動詞	他動詞	例
④	売れる、欠ける、切れる、碎ける、知れる、取れる、ほどける、焼ける、破れる、割れる	-e	-i	売る、欠く、切る、碎く、知る、取る、ほどく、焼く、破る、割る
⑤	荒れる、焦げる、冷める、出る、溶ける ／冷える、増える、燃える		-asi	荒らす、焦がす、冷ます、出す、溶かす ／冷やす、増やす、燃やす
⑧	乾く、飛ぶ、鳴る、減る／生きる、閉じる、伸びる	-i		乾かす、飛ばす、鳴らす、減らす ／生かす、閉ざす、伸びる

このようにして見ると、タイプ④・⑤・⑧間には何かしらの連續性があるように見受けられる。そこで、まずタイプ④と⑤の関連性と差異性を考察し、次いでタイプ⑤と⑧の関連性と差異性について考察する。そして、最後にタイプ⑤の特異性について述べる。

2. タイプ間の関連性

2.1. タイプ④と⑤の関連性

2.1.1. タイプ④と⑤の意味的な異同

タイプ④と⑤は自動詞形が共に [-e] (終止形 [-eru]) になる点で共通している。一方の他動詞は、タイプ④では [-i] (終止形 [-u]) となり、タイプ⑤では [-asi] (終止形 [-asu]) となる。各タイプの具体的な語例は下掲の通り (終止形表示 ^{【*2】})。

【タイプ④ [-e/-i] (終止形 [-eru/-u]) の動詞】

売れる／売る、えぐれる／えぐる、折れる／折る、欠ける／欠く、切れる／切る、くじける／くじく、碎ける／碎く、削れる／削る、裂ける／裂く、知れる／知る、

擦れる／擦る、そげる／そぐ、炊ける／炊く、つれる（釣・吊）／つる、とける
（溶・解）／とく、取れる／取る、抜ける／抜く、脱げる／脱ぐ、ねじれる／ねじ
 る、剥げる／剥ぐ、ひらける／ひらく、振れる／振る、ほどける／ほどく、むける
 ／むく、まくれる／まくる、めくれる／めくる、もげる／もぐ、焼ける／焼く、
 破れる／破る、よじれる／よじる、割れる／割る

【タイプ⑤ [-e/-y)asi]（終止形 [-eru/-y)asu]）の動詞】^[*3]

明ける／明かす、荒れる／荒らす、癒える／癒やす、欠ける／欠かす、肥える／
 肥やす、焦げる／焦がす、さめる（冷・覚）／さます、ずれる／ずらす、絶える／
 絶やす、垂れる／垂らす、出る／出す、とける（溶・解）／とかす、生える／生やす、剥げる／剥がす、化ける／化かす、はれる（晴・腫）／はらす、ばれる／ばらす、冷える／冷やす、増える／増やす、負ける／負かす、蒸れる／蒸らす、燃える／
 燃やす、漏れる／漏らす

タイプ④と⑤は、有対自他動詞において語形が短い方が「基本形」^[*4]になるという考えから見ると、タイプ④は他動詞（終止形での比較）、タイプ⑤は自動詞（連用形での比較）が基本形になる（小池 2018）。

意味の点では、タイプ④の他動詞は＜外的影響による表面的な変形性（「破壊性」も含む）＞を表わす動詞^[*5]と言える。一方のタイプ⑤の自動詞は＜自発的自己完結的な変化＞を表わす動詞と言え、そこに＜a. 主体の意志にかかわらない変化＞と＜b. 表面的な変化＞の双方もしくはいずれか一方の下位特性を含んでいるものと考える。たとえば、「焦げる、さめる（冷・覚）、垂れる、ずれる」などは、いずれも主体の意志とは関係のない変化を表わしており、かつその変化は表面的（視覚や触覚などの感覚に基づく判断が可能）であると言える^[*6]。一方、「化ける」は、「私が死んだら化けて出てやる」のように、主体の意志的な変化と認められる場合もある点でbのみを含んでいる例と言える。

2.1.2. タイプ④⑤連関ペア

形態的な面からタイプ④と⑤を見ると、自動詞を同形として双方のタイプに出現している動詞（前頁のリストで波線で示した動詞）がある。本稿ではこれらの動詞ペアを小池（2019）に倣って「タイプ④⑤連関ペア」と呼ぶ。まずはこのタイプ④⑤連関ペアより、それぞれのタイプの特徴を明らかにする手掛かりを探ってみることにする。

【タイプ④⑤連関ペア】

タイプ④：欠ける／欠く、とける／とく、剥げる／剥ぐ

タイプ⑤：欠ける／欠かす、とける／とかす、剥げる／剥がす

これらのペアは一つの自動詞に対して二つの他動詞を持つという点で形態的な対応関係が認められると言えるが、その一方で意味的に見ると、両タイプの他動詞間に類義関係が認められる場合もあれば、それが認められない場合もある。

前者の例としては「(剥げる／) 剥ぐ・剥がす」が挙げられる。タイプ④他動詞「剥ぐ」とタイプ⑤他動詞「剥がす」の間で、意味の違いはあまり感じられないのではないだろうか。

- 1) a 壁のシールが剥げる (タイプ④⑤自動詞)
b (太郎が) 壁のシールを剥ぐ (タイプ④他動詞)
c (太郎が) 壁のシールを剥がす (タイプ⑤他動詞)

1a は自然に (非意図的に) シールが取れるさまを描写している点で、自動詞の特徴的な意味である<自発的自己完結的な変化>を表わしていると言える。一方の他動詞を用いた1b と 1c は、話者の意図的な働きかけによってシールを取る行為を表わしている点で同義 (類義) になっていると言える^{【*7】}。

次に「とける／とく・とかす」は、当てる漢字によりその用法が異なる。漢字「溶」では、タイプ④と⑤の他動詞間で意味の違いはあまり感じられない (下例 2 の b と c)。

- 2) a 塩が水に溶ける (タイプ④⑤自動詞)
b (太郎が) 塩を水に溶く (タイプ④他動詞)
c (太郎が) 塩を水に溶かす (タイプ⑤他動詞)

いずれも例 1 と同じく、2a は自然な (非意図的な) 変化を、2b, c は何らかの意図的な働きかけに起因する変化を表わしていると言える。

一方、「解」に該当する下例 3 の場合、3c は不自然になる (使役の意味として用いる場合は被使役者を明示する必要があるので、3c の成分だけでは非文になる)。

- 3) a 太郎は数学の難問がすらすら解ける (タイプ④⑤自動詞)
b 太郎が数学の難問をすらすら解く (タイプ④他動詞)
c *太郎が数学の難問をすらすら解かす (タイプ⑤他動詞)

以上は、タイプ④と⑤の他動詞間で意味の類似性が認められる例であったが、これらに対して、「欠ける／欠く・欠かす」は、二種の他動詞間 (下例 4 の b と c) で意味的な類義関係が認められないばかりか、4c のタイプ⑤他動詞「欠かす」の文は非文になる。

- 4) a カッターの刃が欠ける (タイプ④⑤自動詞)

b カッターの刃を欠いて、新しい刃にする（タイプ④他動詞）^[*8]

c* カッターの刃を欠かして、新しい刃にする（タイプ⑤他動詞）

「欠かす」は、現行の用法では「～を欠かさない・欠かすことができない」などのよう打消の形式を伴って用いられるという傾向^[*9]があるため、実質的にはタイプ⑤他動詞「欠かす」を有対自他動詞のペアの中に位置づけることには慎重を期したい。よって、本稿では「欠かす」を考察対象から外し、タイプ④に「欠ける／欠く」のペアのみが属するものとして扱う。

以上の考察より、本稿で対象とするタイプ④⑤連関ペアは「とける／とく・とかす（溶）」と「剥げる／剥ぐ・剥がす」の二つとする。

さて、それぞれのペアに含まれる三つの語形の中で基本形と考えられるのはタイプ④の他動詞である。さらに、『日本国語大辞典』（精選版。以下「日国」と表示する）によれば、各語の古形はそれぞれ「とく、剥ぐ」であり自他両用であった。つまり、タイプ④⑤連関ペアの語群は、タイプ④他動詞と同形の古形が基本形として存在し、それがタイプ④⑤自動詞とタイプ⑤他動詞へと派生していったと考えられるのである（表3参照）^[*10]。そして、この派生の流れは図1のようにモデル化できるであろう。（図1の破線部は、現行では背景化されていることを表わす）。

表3 タイプ④⑤連関ペアの派生の流れ

	自動詞	他動詞
タイプ④	とける	とく、剥ぐ
タイプ⑤	剥げる	とかす、剥がす

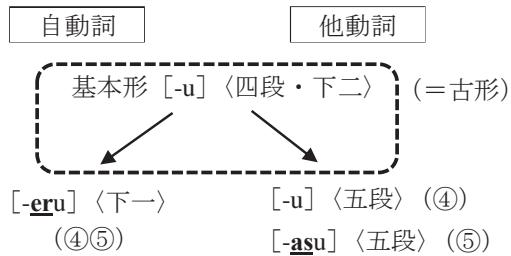


図1 タイプ④⑤連関ペアの派生過程（仮説）

以上より、タイプ④⑤連関ペアより派生の流れは求められたが、では、そもそも似た機能を持つはずの他動詞が、タイプ④他動詞 [-u] とタイプ⑤他動詞 [-asu] の二つの語形として併存しているのはなぜなのだろうか。タイプ④他動詞 [-u] のほかに（に加えて）なぜタイプ⑤他動詞 [-asu] ができたのであろうか。そこにはどのような意味の違いが認められるのであろうか。

2.1.3. タイプ④他動詞 [-u] とタイプ⑤他動詞 [-asu]

井上編（1983：24）では、「とく・とかす」について以下の5と6の例文を示し、5の「氷」のように自然に溶けるものの場合はasを付加した方がよく、逆に6の「卵」のように自然には溶けないものの場合はasは許されないと指摘している（表記は井上1983の原

文通り)。

- 5) 母は氷を { *溶いて・溶かして } 水枕に入れた。
- 6) 母は卵を { といて・*とかして } すまし汁に入れた。

たしかに、「金属を塩酸にー」のように、対象物が触媒により自然に溶けるような場合には「とかす」の方が適切だと思われるし、逆に「片栗粉を水にー」のように、水に入れただまでは自然に溶けない対象物の場合には「とく」の方が適切だと思われる。その点で、この井上の「とく・とかす」に関する説明は首肯できる。

では、「剥ぐ・剥がす」ではどうであろうか。

- 7) 子供が家具に貼りつけたシールを妻が { 剥いだら剥がした }。
- 8) 古い壁紙を { 剥いでたら剥がして } 新しい壁紙を貼った。
- 9) 紋創膏を { 剥いだら剥がしたら }、まだ血が付いていた。

いずれの例も「剥ぐ」でも「剥がす」でも許容される表現ではあると思われるが、シールや壁紙、紋創膏やポスターなど人工的に貼付されたものは、貼られた状態で長い期間存続していくというよりは、いつかは自然に剥がれ落ちるものだという前提があると考えられる点で、「剥がす」の方が使われるのではないかと思われる。

以上の考察を踏まえると、タイプ④⑤連関ペアの他動詞の根底にある意味の違いとしては、タイプ④他動詞 [u] は <自発的には変化しない対象に対して、意図的に働きかけて変化させる> 意味を有していると言えそうである。この例としては、上述の「卵をとく」の他にも「数学の問題を解く」も該当すると考えられる。なお、「{ シール、紋創膏、壁紙 } を剥ぐ」とも言えるが、これは対象を自発的には変化しないもの、つまり何らかの働きかけがない限り剥がれないものと見なしているということになる。一方、タイプ⑤他動詞に見られる as は、「氷を溶かす、シールを剥がす」などのように、<自発的に変化する性質を持つ対象に意図的に働きかけて変化を促進させる> 意味を持つ接辞と言える。

この as に関する説明は、影山 (1996: 195-196) の as に関する説明とも通底している。影山は e と as^[*11] の二つの接辞を、自動詞を他動詞に変換させる「使役化接辞」と設定している。以下に、影山 (1996) で挙げられている例を本研究でのタイプとの対応関係を含めて示しておく。

e : 建つ→建てる、進む→進める、並ぶ→並べる、整う→整える
(= タイプ③他動詞 [-eru])^[*12]

as : 鳴る→鳴らす、飛ぶ→飛ばす、減る→減らす、乾く→乾かす、動く→動かす
(= タイプ⑧他動詞 [-asu])

ずれる→ずらす、蒸れる→蒸らす (=タイプ⑤他動詞 [-asu])
 枯れる→枯らす (=タイプ外: 無対自動詞の使役形) [*13])

そして、e 他動詞は主語を「意図的な動作主 [*14]」に特定する傾向が見られる（例 10）のに対し、as 他動詞は主語を動作主に限定せず出来事や行為を表わす名詞などでも可能である（例 11）点で特徴的であるとする（下掲の例はすべて影山 1996: 196 より）。

10) a { 大工さんが／*彼の持ち家願望が } 家を建てた。

 b { 子供が／*電車の振動が } 石を並べた。

 c { 潜水艦が／*?火災事故が } 商船を沈めた。

11) a { 彼は／ 雨が } 傘を濡らした。

 b { 子供が／ 突風が } ブランコを揺らした。

 c { 運転手が／ 事故が } 電車を遅らした。

そして、as について下記のように述べている（p.198、波線は筆者）。

変化対象の本来的な性質によって状態変化が起るような場合には、使役主はその対象の変化を補助ないし促進する働きを持つ。対象物はもともとそれ自体で変化する可能性があるのだから、使役主は個体でも出来事でもよい。これが-as-, -os-による使役他動詞である。他方、変化対象がそれ自体では変化しないものの場合は、変化を直接的にもたらす（コントロールする）ような使役主が必要となる。

以上の影山（1996）の考察を参考に、本稿ではタイプ⑤他動詞 [-asu] の基本的な意味を〈対象の変形・変質・様態の変化を促進・補助するように働きかける〉と規定する（語例としては、荒らす、焦がす、さます、濡らす、ずらす、負かす、冷やす、増やす、燃やすなど）。

例えは「社長が人員を増やす」は“社長が部下に直接働きかけて、人員を現状よりも多い状態になるように促進する”行為であり、「魚を焦がす」は“人が火という間接的なモノを使って、魚が焦げる状態になるよう促進する”行為であると言える。ただ、「ライバルのチームを負かす」では、（この場合は「勝ち負け」という様態の）変化の「促進」を表わしているというよりは、“ライバルのチームを負かした”という「結果」を表わしているように解釈される点で、〈行為（変化）を完遂する〉という意味も含まれる場合があると考えられる [*15]。ただし、この解釈の妥当性については更なる考察が必要だと思われる所以、ここでは指摘にとどめておく。

タイプ④⑤連関ペアに属す「とかす、剥がす」については、上述の井上編（1976）を踏まえ、この基本義の「対象」にかかわる部分に〈自発的に変化する（と話者が想定する）

性質を持つ対象に対して>という制約を伴うものとする。ただし、この制約はあくまでもタイプ④⑤連関ペアに限定されたものであり、タイプ⑤他動詞に敷衍することは難しいと思われる。たとえば「書棚の位置をずらす」や「部屋を荒らす」などは、書棚や部屋は自発的にずれたり荒れたりはしない。その点で、この制約はあくまでもタイプ④⑤連関ペアに限定されるものと考えられる。

一方のタイプ④他動詞 [-u] は、小池 (2019) で述べた<外的影響による表面的な変形性（「破壊性」をも含む）>を基に、まず<対象に働きかけて、その変形・変質・様態の変化・破壊を完遂する>と規定する^[*16]（語例としては、売る、折る、切る、炊く、取る、脱ぐ、ほどく、焼く、破る、割るなど）。たとえば、「枝を折る」や「ビニールを破る」などは、枝の様態が変化した状態やビニールが変形・破壊された状態になった（=完遂した）ことを表わしていると言える。

なお、タイプ④他動詞 [-u] とタイプ⑤他動詞 [-asu] の所属語を見てみると、タイプ④には「切る、碎く、破る、割る」などのように「変形」と言うよりも「破壊」と言った方が妥当だと思われる語が含まれていることから、タイプ④の規定に「破壊」を含めた。

そして、タイプ④⑤連関ペアに属する「とく、剥ぐ」においては、井上編 (1976) を踏まえて、この規定に<自発的に変化しない（と話者が想定する）性質を持つ対象に対して>という制約が付加されると考える。が、この制約はタイプ④他動詞 [-u] にも敷衍できると思われる点で、上記のタイプ⑤他動詞 [-asu] の場合と異なる。たとえば「紐を切る」や「コップを割る」などは、紐やコップは自発的に切れたり割れたりという変化はない。この点で、この制約はタイプ④他動詞にも該当するものと考えられる。

以上の考察をまとめると、タイプ④他動詞 [-u] とタイプ⑤他動詞 [-asu] の基本義は以下のようになる。

タイプ④他動詞 [-u] の基本義

自発的に変化しない（と話者が想定する）対象に、その変形・変質・様態の変化・破壊を完遂するよう働きかける。

タイプ⑤他動詞 [-asu] の基本義

対象の変形・変質・様態の変化を完遂させるために促進・補助するよう働きかける。

（ただし、タイプ④⑤連関ペアに属す動詞は、「対象」に関して<自発的に変化する（と話者が想定する）性質を持つ対象に対して>という制約を伴う。）

以上、タイプ④⑤連関ペアにおいて、同じ他動詞であるのに [-u] と [-asu] の二つの語形を持つ理由について考察をした。その結論としては、<対象への働きかけ>という他動詞共通の意味のほかに、タイプ⑤他動詞 [-asu] には<変化の促進・補助>という特徴

を、一方のタイプ④他動詞 [-u] には<変化の完遂>という特徴を明示するためであると言えそうである。

2.1.4. タイプ④と⑤の自動詞 [-eru]

タイプ④と⑤の自動詞はいずれも [-eru] である。

タイプ④自動詞：切れる、碎ける、取れる、ほどける、焼ける、破れる、割れる…

タイプ⑤自動詞：焦げる、冷める、ずれる、出る、溶ける、増える、燃える…

タイプ⑤自動詞は、2.1.1 にて<自発的自己完結的な変化>を基本義とし、その下位特性として< a. 主体の意志にかかわらない変化>と< b. 表面的な変化>の双方もしくは一方を有すると設定した。

これをタイプ④自動詞の意味と比べてみると、タイプ④自動詞においても<自発的自己完結的な変化>および< a. 主体の意志にかかわらない変化>と< b. 表面的な変化>の意味が認められると思われる。

ただ、タイプ④自動詞の方が対象を<破壊>する性質が強い語が多いようである。この<破壊性>は、2.1.3 で述べたタイプ④の基本形である他動詞の基本義<自発的に変化しない（と話者が想定する）対象に、その変形・変質・様態の変化・破壊を完遂するよう働きかける>を受け継いでいるものと考えられる。

2.2. タイプ⑤と⑧の関連性

タイプ⑤と⑧は他動詞連用形が共に [-asi]（終止形 [-asu]）になる点で共通している。一方の自動詞は、タイプ⑤は [-e]（終止形 [-eru]）、タイプ⑧は [-i]（終止形 [-u]）となる。基本形はタイプ⑤も⑧も自動詞である。

以下に、前出のタイプ⑤の動詞とその古形およびタイプ⑧に該当する動詞を示す。

なお、タイプ⑧は連用形活用語尾 [-i／-asi] の観点から分類したものであるが、終止形活用語尾から見ると、二つの異なる活用語尾のタイプが含まれている。

[-u／-asu] タイプ：動く／動かす、乾く／乾かす、飛ぶ／飛ばす、など

[-iru／-asu] タイプ：閉じる／閉ざす、伸びる／伸ばす、いきる／いかす、など

後者の [-iru／-asu] タイプについては、タイプ⑨ [-iru／-osu] との関連において別途考察したいと考えているため、以下本稿では [-iru／-asu] タイプを考察の対象外とする。

以上を踏まえると、タイプ⑤と⑧の所属ペアは以下のようになる。

【タイプ⑤ [-e／-(y)asi]（終止形 [-eru／-(y)asu]）の動詞】

明ける／明かす、荒れる／荒らす、癒える／癒やす、肥える／肥やす、焦げる／焦がす、さめる（冷・覚）／さます、ずれる／ずらす、絶える／絶やす、垂れる／垂らす、出る／出す、とける（溶・解）／とかす、生える／生やす、剥げる／剥がす、化ける／化かす、はれる（晴・腫）／はらす、ばれる／ばらす、冷える／冷やす、増える／増やす、負ける／負かす、蒸れる／蒸らす、燃える／燃やす、漏れる／漏らす

【タイプ⑧ [-i/-asi]（終止形 [-u/-asu]）の動詞】

動く／動かす、乾く／乾かす、照る／照らす、飛ぶ／飛ばす、鳴る／鳴らす、減る／減らす、漏る／漏らす

2.2.1. [-asi (asu)] 他動詞と無対自動詞の使役形

上掲のタイプ⑤と⑧の動詞ペアは、小池（2018）で提示されていたものから大幅に所属するペアの修正が加えられている。それは小池（2018, 2019）以降に当該タイプの動詞について再検討を加えた結果を踏まえたからである。

そこで、タイプ⑤と⑧の関連性と個別性の考察に入る前に、タイプ⑤と⑧の他動詞と無対自動詞（非対格動詞および非能格動詞の一部が該当する）の使役形に関する本稿での分類基準について述べておきたいと思う。

タイプ⑧の他動詞形は [-asu]（本節では便宜上終止形で表示する）であるが、いわゆる非対格動詞の使役形「降る→降らす、光る→光らす、腐る→腐らす」やいわゆる非能格動詞の使役形「歩く→歩かす、走る→走らす、急ぐ→急がす」においても [-asu] が用いられている。しかし、タイプ⑤と⑧の他動詞 [-asu] と非対格動詞・非能格動詞の使役形 [-asu] との間には、以下のような違いがある。

それは<使役>、すなわち“対象が有情物・無情物にかかわらず、対象に働きかけること”でその変化を引き起こす（CAUSE）”（影山 1996、早津 2016）という意味の有無である。非対格動詞・非能格動詞の使役形は当然のことながらこの意味を持っている。また、[-asu] の部分を [-aseru] [*17] にしても<使役>の意味は保持されており、意味的な共通性が認められる [*18]。

非対格動詞（無意志自動詞）の使役形 [-asu]

〔自然現象に関する動詞〕

降る／降らす=降らせる	光る／光らす=光らせる	腐る／腐らす=腐らせる
浮く／浮かす=浮かせる	散る／散らす=散らせる	匂う／匂わす=匂わせる

〔情意に関する動詞〕

喜ぶ／喜ばす=喜ばせる	泣く／泣かす=泣かせる	笑う／笑わす=笑わせる
驚く／驚かす=驚かせる	悩む／悩ます=悩ませる	困る／困らす=困らせる

非能格動詞（意志自動詞）の使役形 [-asu]

歩く／歩かす=歩かせる	走る／走らす=走らせる	急ぐ／急がす=急がせる
踊る／踊らす=踊らせる	添う／添わす=添わせる	

一方、タイプ⑤の他動詞 [-asu] には<使役>は認められるものの、[-aseru] にすると<可能>の意味となり、[-asu] と [-aseru] との間に意味的な共通性はなくなる。

タイプ⑤他動詞 [-asu]

焦げる／焦がす≠焦がせる	冷める／冷ます≠冷ませる	出る／出す≠出せる
冷える／冷やす≠冷やせる	増える／増やす≠増やせる	燃える／燃やす≠燃やせる

また、タイプ⑧の他動詞 [-asu] にも<使役>が認められるが、[-aseru] にすると<可能>と<使役>の双方の意味が生じてしまい、非対格動詞・非能格動詞の場合のような [-asu] と [-aseru] とが<使役>のみで共通しているとは言えなくなっている（便宜上 “=” で示す）。

タイプ⑧他動詞 [-asu]

乾く／乾かす=乾かせる	飛ぶ／飛ばす=飛ばせる	照る／照らす=照らせる
鳴る／鳴らす=鳴らせる	減る／減らす=減らせる	

なお、無対自動詞で<可能>の意味を表わそうとした場合、非対格動詞では「降らせられる、浮かせられる、喜ばせられる」といった [-aserareru (-a セラレル)] 形にしなければならず、非能格動詞は「歩ける、走れる、帰れる、踊れる」といった可能形にする必要がある [*19]。

以上を踏まえ本稿では、自動詞（非対格動詞・非能格動詞）の使役形をそれぞれの動詞に対する他動詞形とは見なさず、よってそれらの動詞ペアも有対自他動詞とは見なさない（つまり、無対自動詞と見なす）という立場を取る。一方で、有対自他動詞のタイプ⑤および⑧として認めるのは、他動詞の [-aseru] 形に<可能>の意味を持つものとする。

以上の考察から、小池（2018）ではタイプ⑤としていた「枯れる／枯らす、切れる／切らす、紛れる／紛らす」などのペア、およびタイプ⑧としていた「急ぐ／急がす、浮く／浮かす、反る／反らす」などのペアは、本稿では無対自動詞とし、考察の対象から外す。

なお、タイプ⑤に分類した他動詞の [-aseru] の中には、<使役>と<可能>の両方が備わっていると考えられるものもある。たとえば、「ずらす」に対する「ずらせる」や「蒸らす」に対する「蒸らせる」などである。ただ、これらの [-a セラレル] 形 (*ずらせられる、*蒸らせられる）は非用になるので、本稿ではタイプ⑤のままとする。

2.2.2. タイプ⑤⑧連関ペア

タイプ⑤と⑧には他動詞形は共通だが、自動詞形が異なるペアが認められる。これを「タイプ⑤⑧連関ペア」と呼ぶことにする。タイプ⑤と⑧のそれぞれの特徴を考察する前に、まずこの連関ペアの特徴から考察を始める。

【タイプ⑤⑧連関ペア】

- タイプ⑤：漏れる／漏らす
タイプ⑧： 漏る／漏らす

表4 タイプ⑤⑧連関ペアの派生の流れ

	自動詞	他動詞
タイプ⑤	漏れる	
タイプ⑧	漏る	漏らす

タイプ⑤⑧連関ペアの基本形はタイプ⑧自動詞（漏る）になると考えられ、その派生の流れはタイプ⑧自動詞からタイプ⑤自動詞（漏れる）とタイプ⑤⑧他動詞（漏らす）へと派生していくと仮定する（表4参照）。では、タイプ⑧自動詞 [-u] とタイプ⑤自動詞 [-eru] とはどのような違いがあるのだろうか。「漏る・漏れる」に即して考察する。

「漏る」は、古形（「もる」と表示する）より自動詞のみで用いられ、四段活用と下二段活用があった。四段活用の方が古く、下二段活用の例は平安後期から見られるようになり、また鎌倉・室町時代には、四段「もる」は水などが漏れる場合に、下二段「もる」は抽象的比喩的な場合に用いられた^{【*20】}。また、日国では、「漏らす」の用例に平安中期成立の『伊勢物語』からの例が挙げられている。

以上のことから、古形「もる」（自動詞）から、まず平安中期に他動詞「もらす」が生じ、平安後期になって“液体が漏れる”意味と“抽象的・比喩的な漏洩”の意味の違いをそれぞれ四段活用「もる」と下二段活用「もれる」に分化させたと考えられる。つまり、「もる」を元に「漏る・漏れる／漏らす」が派生していくと考えられるのである。

この派生過程は図2のように示せる（かっこ内の丸数字はタイプを示す）。

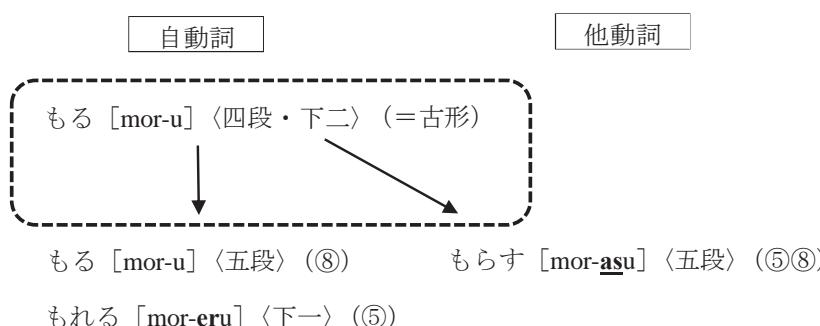


図2 タイプ⑤⑧連関ペアの派生過程（仮説）

ただ、現代語では「漏る」は「水が漏る」「天井から雨が漏る」などのように液体が漏れ出す場合に用いられることがあるが、同様の意味で「水が漏れる」「天井から雨が漏れる」も自然な表現として使われている。この両語を比べると、「漏る」は終止形の場合のみに用いられる固定化された表現のようになっていると思われ、逆に終止形以外では下掲の例 12 のように「漏れる」の方が使われやすいのではないかと思われる^[*21]。その一方で、例 13 のような“抽象的・比喩的な漏洩”的場合には「漏れる」のみが使われる点は、平安後期以降から意味・用法に変化はないと言えそうである。

- 12) a 「水道管から水が {漏らない＜漏れない} ように補修テープを巻いておきましたので、また水が {漏ったら＜漏れたら} 連絡をして下さい。」
 b 「鞄から何か {?漏っている＜漏れている} よ。」
 c 天井から雨が {漏って＜漏れて}、床が水浸しになった。
 d 「ママ、おしつこが {漏っちゃう＜漏れちゃう} よ。」
 13) 秘密が {*漏る／漏れる}。

このように考えると、現行では「漏る」も「漏れる」も同義として認められる場合もあるが、「漏れる」の方が「漏る」を内包するようになってきていると言える。この点で、タイプ⑤⑧連関ペアとして取り出された「漏る・漏れる／漏らす」ではあるが、今後は「漏れる／漏らす」として、タイプ⑤のみに属すペアとなっていく可能性が考えられる。

2.2.3. タイプ⑤と⑧の意味的な異同

タイプ⑤とタイプ⑧は、他動詞形は共通して [-asu] を有しているが、自動詞形は [-u] と [-eru] の二つに分かれている点で異なっている。そこで、まずタイプ⑤と⑧の自動詞の違いについて考察し、次いで他動詞の違いについて見ていくことにする。

2.2.3.1. タイプ⑤自動詞 [-eru] とタイプ⑧自動詞 [u]

タイプ⑤と⑧の自動詞間には、どのような違いが見られるのであろうか。

タイプ⑤自動詞 [-eru]：明ける、焦げる、さめる（冷・覚）、出る、増える、燃える…
 〈④⑤連関〉とける、剥げる 〈⑤⑧連関〉漏れる

タイプ⑧自動詞 [-u]：動く、乾く、照る、飛ぶ、鳴る、減る 〈⑤⑧連関〉漏る

タイプ⑤自動詞 [-eru]^[*22] は、2.1.1 で述べたように、大枠では<自発的自己完結的な変化>という意味があり、その下位に<a. 主体の意志にかかわらない変化>と<b. 表面的な変化>という特性の両方もしくは一方を持つと考えられる^[*23]。

タイプ⑧自動詞 [-u] も、このタイプ⑤自動詞と同様の意味があるものと見られる。す

なわち、上掲のいずれの動詞にも<a. 主体の意志にかかわらない変化>と<b. 表面的な変化>の双方もしくは一方が認められそうである。

- 14) a 洗濯物が乾く。電源を入れると機械が動く。人口が減る。雨が漏る。
 b 鐘が鳴る。

14aはaとbの双方を持つ例であり、14bは“鐘が鳴る”こと（様子）がbの表面的な変化とは見なせない点で、aのみを持つ例と言える。

以上より、タイプ⑤自動詞 [-eru] とタイプ⑧自動詞 [-u] は双方とも<自発的自己完結的な変化>、およびその下位特性として<a. 主体の意志にかかわらない変化>と<b. 表面的な変化>が設定でき、そしてこの両タイプに属する自動詞はaとbの両方もしくは一方を有する、ということになる。

2.2.3.2. タイプ⑧自動詞の特徴

タイプ⑧自動詞に属す動詞の中には、タイプ⑤自動詞と同形の接辞であるerを挿入できる動詞とできない動詞がある。

erを挿入できる動詞：動く ugok-u → 動ける ugok-er-u、飛ぶ→飛べる
 erを挿入できない動詞：乾く kawak-u →*乾ける kawak-er-u、鳴る→*鳴れる、
 減る→*減れる、（日が）照る→*（日が）照れる

タイプ⑧自動詞にerが挿入できる動詞は、er挿入形の意味が<可能>になる点で、「焦げる、冷める、濡れる」などのタイプ⑤自動詞 [-eru] の<非可能>の意味とは異なっている^[*24]。その一方で、タイプ⑧他動詞 [-asu] のer挿入形（as-er-u形）も意味が<可能>になる点で、タイプ⑧自動詞と共通している。

タイプ⑧	自動詞 [-u]	他動詞 [-asu]
「動く」 ugok-u		「動かす」 ugok-as-u
「飛ぶ」 tob-u		「飛ばす」 tob-as-u
	↓	↓
「動ける」 ugok- <u>er</u> -u	=<可能>=	「動かせる」 ugok-as- <u>er</u> -u
「飛べる」 tob- <u>er</u> -u		「飛ばせる」 tob-as- <u>er</u> -u

ただし、この「動ける・動かせる」と「飛べる・飛ばせる」は、同じ<可能>と言っても、その性質には違いが存在する^[*25]。

- 15) a 病気が治り、やっと体 {が動ける・を (が) 動かせる} ようになった。
 b ギブスが取れ、やっと右腕 {*が動ける・を (が) 動かせる} ようになった。
 c 太郎はクレーン {*が動ける・を動かせる}。
- 16) a スーパーマン、バットマン、スパイダーマンの中では、スーパーマン (だけ) が {飛べる・*飛ばせる}。
 b 太郎は上手にドローン {*が飛べる・を (が) 飛ばせる}。

「動ける、飛べる」は<動作主が自己の身体の全体にかかわることをコントロールする能力を有す>という意味 (15a, 16a) なのに対し、「動かせる、飛ばせる」は<動作主が他者 (15c, 16b) および自己の身体の全体 (15a) もしくは一部分 (15b) をコントロールする能力を有す>という意味になると言える。

一方、er の挿入が許容されないタイプ⑧自動詞は、対応する他動詞 [-asu] に er を挿入した [-as-er-u] にすると<可能>および<使役>の意味になる。

タイプ⑧	自動詞 [-u]	他動詞 [-asu]	
	「乾く」 kawak-u	「乾かす」 kawak-as-u	
	「減る」 her-u	「減らす」 her-as-u	
	↓	↓	
	* 「乾ける」 kawak- <u>er</u> -u	= <可能>	「乾かせる」 kawak-as- <u>er</u> -u
	* 「減れる」 her- <u>er</u> -u	= <使役>	「減らせる」 her-as- <u>er</u> -u

このようにタイプ⑧自動詞は er の挿入の可否という点で異なった性質を持つ動詞が含まれていることになるのだが、この点については稿を改めて考察することとし、本稿では現象の指摘にとどめておく。

2.2.3.3. タイプ⑤および⑧の他動詞 [-asu]

タイプ⑤と⑧の他動詞はいずれも [-asu] である。

タイプ⑤他動詞：とかす、はがす・焦がす、ずらす、出す、溶かす、逃がす、冷やす、蒸らす 〈⑤⑧連関〉 漏らす

タイプ⑧他動詞：動かす、乾かす、照らす、飛ばす、鳴らす、減らす
 〈⑤⑧連関〉 漏らす

タイプ⑤他動詞は、2.1.3.において<対象の変形・変質・様態の変化を完遂させるために促進・補助する働きかけ>の意味を持つと規定した。タイプ⑧他動詞を見ると、いずれもこの意味を有しているように見られることから、タイプ⑤と⑧の他動詞間に通底する意味

には大きな相違は認められないと思われる。

2.3. タイプ⑤の三つの下位類

表2において本稿で対象とする動詞タイプの一覧表を掲げたが、ここまで考察よりタイプ⑤には専属の動詞ペア（タイプ⑤専属ペア）の他に、タイプ④との関連が認められるタイプ④⑤連関ペア、およびタイプ⑧との関連が認められるタイプ⑤⑧連関ペアがあることがわかった。

タイプ⑤専属ペアには、タイプ④⑤連関ペアの「とける／とく・とかす」「はげる／はぐ・はがす」の2ペア、またタイプ⑤⑧連関ペアの「漏る・漏れる／漏らす」の1ペア以外のペアが含まれる。

タイプ⑤専属ペア

【タイプ⑤ [-e/-y)asi]（終止形 [-eru/-y)asu]）の動詞】

明ける／明かすくあく>、荒れる／荒らすくある>、癒える／癒やすくいゆ>、肥える／肥やすくこゆ>、焦げる／焦がすくこぐ>、さめる（冷・覚）／さますくさむ>、ずれる／ずらすくずる>、絶える／絶やすくたゆ>、垂れる／垂らすくたる>、出る／出すく（い）づ>、生える／生やすくはゆ>、化ける／化かすくばく>、はれる（晴・腫）／はらすくはる>、ばれる／ばらすくばる>、冷える／冷やすくひゆ>、増える／増やすくふゆ>、負ける／負かすくまく>、蒸れる／蒸らすくー>、燃える／燃やすくもゆ>

タイプ⑤専属ペアには、たとえば「明ける／明かす」には「あく」、「荒れる／荒らす」には「ある」のように、現行形とは異なる古形が存在した（上記リストの< >内）。これらの古形は、現在では使われないものの、背景化されて各動詞に影響を与えていたと考えられる。そこで、これらの古形を調べてみると、下二段活用の自動詞のものが多いことがわかった（上記リスト< >で下線の語^[*26]）。つまり、下二段活用終止形 [-u] の自動詞が後に下一段化して [-eru] になったという過程が想定できるのである^[*27]。

タイプ④⑤連関ペアは [-u] は他動詞であり、[-eru] は自動詞であった（とける／とく、はげる／はぐ）。一方、タイプ⑤⑧連関ペアは [-u] も [-eru] も自動詞であった（漏る・漏れる（／漏らす））。すると、タイプ⑤専属ペアはタイプ⑤⑧連関ペアと近い関係性、すなわち自動詞 [-u] から自動詞 [-eru] を派生した語が多いと考えられるのである。これは、2.2.2においてタイプ⑤⑧連関ペア「漏る・漏れる／漏らす」の「漏る」が「漏れる」に比べて使用域が狭い点を指摘したが、このことは引いては「漏る」の退行、すなわち「漏れる／漏らす」のみのペア（＝タイプ⑤）の確立にもつながっているとも言える。これは、まさしくタイプ⑤専属ペアの成立過程と軌を一にするものと思われる。

以上を踏まえ、タイプ⑤に含まれる三種の下位類の特徴は以下のようにまとめられる。

(a) タイプ④⑤連関ペア

タイプ④の他動詞形（古形と同形）を基本形として、タイプ⑤の自動詞と他動詞を派生させたもの。タイプ④自動詞とタイプ⑤自動詞は同形である。

(b) タイプ⑤専属ペア

古形（多くは自動詞）を基本形として、現行の自動詞と他動詞を派生させたもの。

(c) タイプ⑤⑧連関ペア

タイプ⑧の自動詞形（古形と同形）を基本形として、タイプ⑤の自動詞と他動詞を派生させたもの。タイプ⑧他動詞とタイプ⑤他動詞は同形である。

表5 タイプ⑤とタイプ④・⑧との関連

	自動詞		他動詞		古形
④	-e (-eru)	取れる、焼ける、破れる	取る、焼く、破る	-i (-u)	とる、やく、やぶる
		(a) とける、はげる	とく、はぐ		とく、はぐ
		(b) 焦げる、出る、冷える	とかす、はがす	-asi (-asu)	こぐ、(い)づ、ひゆ
⑤		(c) 漏れる	焦がす、出す、冷やす		もる
		漏る	漏らす		かわく、とぶ、へる
⑧	-i (-u)	乾く、飛ぶ、減る	乾かす、飛ばす、減らす		

表5では、実線太枠で囲った(a)はタイプ④⑤連関ペアを、破線太枠で囲った(c)はタイプ⑤⑧連関ペアを、それらの間に挟まれた(b)はタイプ⑤専属ペアを示している。また、色の付いたマスはそこが基本形であることを示している。

なお、2.1.1 や 2.2.3.1においてタイプ⑤の基本形を自動詞と規定したが、表5より、古形の存在が背景化されている場合（タイプ⑤b）と古形が他のタイプの他動詞形もしくは自動詞形として残っている場合（タイプ⑤a,c）があることもわかった。ただし、これらの古形は自動詞としての用法を持っていたこと、および現行において「溶けマス／溶かしマス」のように自動詞形の方が短いことなどから、現行形におけるタイプ⑤の基本形は自動詞と見なすことにしたい^[*28]。

3. おわりに

本稿では、有対自他動詞のうち活用形に連續性が認められるタイプ④・⑤・⑧、すなわ

ち自動詞連用形が [-e] (終止形 [-eru]) で共通するタイプ④と⑤、および他動詞連用形が [-asi] (終止形 [-asu]) で共通するタイプ⑤と⑧を中心に、それぞれの異同について考察した。

本文中でも考察しきれなかった点や別項に譲らざるを得ない点について言及はしたが、その他にも、どうしてタイプ⑤専属ペアの古形は残らずに、自動詞 [-eru] や他動詞 [-asu] に取って代わられたのかなどについても考察を進める必要があるだろう。

注

- *1 本稿では、“／”の左項に自動詞、右項に他動詞を表示する。
- *2 波線の語はタイプ④⑤連関ペア (2.1.2 参照) を、タイプ⑤の二重線の語はタイプ⑤⑧連関ペア (2.2.2 参照) を表わす。
- *3 ここに挙げたタイプ⑤の動詞ペアは、小池 (2018) で提示したペアと異同がある。その点については 2.2.1 で述べる。
- *4 有対自他動詞には基本形と派生形があり、基本形に辞的成分が付加されることによって派生形が形成されると考える。結果、派生形に比べ基本形は語形が短い点にポイントがある。また、このことは基本形の方が古い語形であるということも意味している (鈴木 1972、島田 1979、小池 2018・2019 参照)。
- *5 「売る、知る、つる (吊・釣)」などにも<外的影響による (表面的な) 変形性>を認めることについては、小池 (2018) を参照のこと。
- *6 タイプ⑤の「出る」は、「芽が出る」などの自動詞用法の場合であり、他動詞「出す」とペアになる場合に限る。よって、「家を出る」のような他動詞用法の「出る」は対象外とする。
- *7 影山 (1996: 181) には、「剥げる／剥ぐ」に関して下記の記述が見られる。
「はげる」は-eru という形態が付いているにも拘わらず、現代日本語では、他動詞から派生されたのではなく、もともと自然発生を意味する非対格動詞として認定されなければならない。形態的、歴史的には「はげる」の他動詞は「はぐ」だろうが、「*ペンキをはぐ」とは言えず、逆に「木の皮をはぐ」に対応する意味で「*木の皮がはげる」と言えないことからも、現代語では「はぐ」と「はげる」は別々の動詞と考えねばならない。
しかし、「{塗装、芝、生爪} が剥げる／を剥ぐ」などのように自他で対応している場合もあることから、影山の「剥ぐ」と「剥げる」を有対自他動詞と見なさないことは首肯しがたい。
- *8 タイプ⑤他動詞「欠く」は非意図的な行為で用いられる場合もある；(太郎が) 茶碗の端を欠く。
- *9 『広辞苑 第六版』、『明鏡国語辞典 第二版』の「かかす (欠かす)」の語注より。
- *10 タイプ⑤他動詞「剥がす」は、タイプ⑥ [-reru／-su] において「剥がれる／剥がす」のペアを成す。その点で④⑤⑥連関ペアと言える。

- *11 影山（1996：195）では as と共に os も設定されているが、本稿には直接関係しないため os については省略する。
- *12 括弧内は、影山（1996：195）で挙げられた例に本研究で該当するタイプを補記したものである。影山（1996）での e は本研究における [-eru]（タイプ③他動詞）に該当する。
- *13 影山（1996：195）では「枯れる／枯らす」を有対自他動詞のペアと考えているようであるが、本稿ではこの見方を探らない。本稿における他動詞 [-asu] 形と使役 [-asu] 形の違いについては 2.2.1 で述べる。
- *14 影山（1996：196）では「個体」とよび、「意図的な動作主」を指すとある。また、「個体（人間）」という表示も見られる（p.198）。
- *15 「鳴らす」も、「鐘を鳴らす」のように、“鐘を叩いて音を生じさせる行為”が「完遂」したことを表わしていると言える。
- *16 タイプ①他動詞も他動詞終止形に [-u] を持つ—かぶす、刺す、繋ぐ、はさむなど—が、これは<外的影響による対象の様態の変化>を表わすが、対象自体の変形や変質を遂行するわけではない点で、タイプ④他動詞 [-u] と異なる。
- *17 早津（2016：4）の「使役動詞」に該当する。
- *18 寺村（1982：317）も参照。なお、吉田（1971：101）には、明治期以降の小説の用例を踏まえ、<使役>の「す」は関西的であり、「せる」は東京的であるとの指摘が見られる。
- *19 言うまでもなく、「～ることができる」を用いても可能表現になる。
- *20 『日本語文法大辞典』（以下「文法辞典」と表示する）「もれる・もらす」の項、小島聰子氏執筆：801-802
- *21 “<”は左項よりは右項の方が使われやすいのではないかという筆者の内省を示す。これは左項が必ずしも不自然であるということを意味しない。不自然と判定した場合は“?”を付した。なお、例 12 は筆者の内省に基づく判定であり、人によっては使用方言の影響などにより判定が変わる場合があることも十分に考えられる。
- *22 接辞 er の性質および終止形 [-u] に接辞 er が付加する過程については、小池（2019）を参照。また、影山（1996）の 4.2 も参照のこと。
- *23 影山（1996：184）は、自動詞化接辞-e-で派生される自動詞（本稿でのタイプ④とタイプ⑤の自動詞 [-eru] に該当する）は英語の能格動詞とほぼ対応しているという。また、このタイプの自動詞は「反使役化 anti-causativization」の作用により他動詞より変換されるとする。
- *24 タイプ⑤⑧連関ペアの「漏れる」は「漏る」に er が付加しているが、その意味は<可能>ではない点で、タイプ⑧自動詞の er 挿入形とは性質が異なっていると言える。
- *25 「飛ばせる」には<使役>も認められる。
- *26 日国や文法辞典によると、タイプ⑤専属ペアのうち「あく（明く）」や「たる（垂

る)」は自他両用であった。また、「蒸れる／蒸らす」については、日国には古形の表示がなく、文法辞典では古形として「むる」を表示しているが、それに関する例や言及はない。文法辞典には、「蒸れる／蒸らす」は現代になってから多く用いられるようになつた旨の記述が見られる (p.775)。

*27 四段活用と下二段活用の派生関係については、青木 (2010 : 1-66) に詳細な考察がある。

*28 この点、小池 (2019) で分析したタイプ②と似た構造を持つことに留意されたい。

参考文献

- 青木博史 (2010) 『語形成から見た日本語文法史』、ひつじ書房
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 下・意味解釈を中心に』、大修館書店
- 井上和子編 (1983) 『講座 現代の言語 1 日本語の基本構造』、三省堂
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点—』、くろしお出版
- 小池 康 (2018) 「有対自他動詞の類型性から見た派生過程の考察」『日本語・日本文化研究』28、大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻、pp.1-23
- 小池 康 (2019) 「類型性から見た有対自他動詞の研究—終止形活用語尾 [-aru] 自動詞と [-eru] 他動詞を中心に—」『日本語・日本文化研究』29、大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻、pp.104-123
- 佐久間鼎 (1951) 『現代日本語の表現と語法』、恒星社厚生閣
- 佐久間鼎 (1983) 『現代日本語の表現と語法<増補版>』、くろしお出版
- 島田昌彦 (1979) 『国語における自動詞と他動詞』、明治書院
- 鈴木丹士郎 (1972) 「動詞の問題点」『品詞別日本文法講座 動詞』、明治書院、pp.133-180
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』、くろしお出版
- 西尾寅弥 (1988) 『現代語彙の研究』、明治書院
- 早津恵美子 (2016) 『現代日本語の使役文』、ひつじ書房
- 吉田金彦 (1971) 『現代語助動詞の史的研究』、明治書院 (『吉田金彦著作選 7 現代語の助動詞』2010、明治書院、再録)